

健康は呼吸で決まる



西原 克成

はじめに

人間が生きていくうえで、不可欠なのが「呼吸」です。呼吸が五分間も止まれば死んでしまいます。次に大切なのが「食事」で、食べ物を摂らないと呼吸で燃焼するエネルギー源が補給されないのです。呼吸をいくらしても、やはり死んでしまいます。三つ目に大切なのが「睡眠」です。睡眠は生命維持活動とは直接関係がないように見えるので、いまのライフサイエンスでは睡眠の重要性がすっかり見落とされていきます。人間

にとって睡眠は「骨休め」として重要です。これは重力作用の解除、つまり立位・座位による位置のエネルギーの解消です。骨休めは細胞呼吸と新陳代謝に必須なのです。

「呼吸」については、日本の子供のほとんどが鼻呼吸ではなく口呼吸になってしまっています。口で呼吸できるのは、哺乳動物では一歳以降の人類だけです。これは人体のもっとも大きな構造欠陥なのです。

人類が口呼吸をするようになった原因は、約四〇〇万年前ごろ類人猿から分離した時に、喋ることを始め

たからです。人間が喋る時は、必ず口から空気を出します。動物のなかには口から空気が出せない動物がいます。たとえば、サルやイヌやネコは口から声が出せますが、ウマやブタは鼻からしか声が出せないため、ヒヒーン、ブーブーといった同じ鳴き声しか出ないのです。

呼吸は生きていくうえで重要なものですから、鼻腔と気管がつながっています。この気管が食道の入り口の真中にあるために、ヒト以外の哺乳動物は、これが邪魔をして丸嚥みすることができません。ネズミやリスには頬に袋があって、この袋に食べ物を貯めて食片を小さくして、気管の両脇を通して呼吸をしながら食べ物を嚥み込むのです。

哺乳類が乳を吸うには、口のなかの気圧を低くしなければなりません。しかもお乳を飲んでいる間も呼吸し続ける必要があります。そのため人間の乳児は、お乳を吸いながら鼻で呼吸ができるように、鼻腔と気管が鼻の奥(後鼻孔の軟口蓋部)で直接つながっているのです。人間以外の哺乳動物は、成獣になってもこの構造を保ちます。しかし人間だけは生後一年ほどたつと、鼻腔と気管が離れてしまいます。言葉を話すことにより、「骨や軟骨の形態は長期的な機能の偏りによって、それに適したように変形する」というウォルフ

の法則に従って喉頭蓋軟骨が徐々に縮小するからです。そしてヒトはついでに口で呼吸ができるようになったのです。

なぜ健康は「呼吸」で決まるのか

① 生命の呼吸とはなにか

では、健康が「呼吸」で決まるのは、なぜでしょうか。これを理解するには「生命の呼吸」とは何かが解らなければなりません。

二〇世紀のライフサイエンスでは、このような生命現象の本質をつきつめて考えなかつたために、進化がどうして起こるのか、免疫システムはどのようなメカニズムになっているのか、造血というもともと腸で行われていた仕事は、なぜ高等動物に限って骨髄腔に移っているのか、という脊椎動物三つの謎が迷宮入りしていたのです。

「呼吸」とは、エネルギーの代謝のことです。代謝とは入れ替わりのことです。渦でたとえると、エネルギーの渦が巡って、渦をつくる流れの物質が常に入れ替わることです。生命のエネルギー代謝には嫌氣的解糖(酸素なしに行われる糖分の分解)と好氣的酸素による呼吸の二種類があります。

生命現象とは、このエネルギーの渦と同時に(共役

して）起こる細胞やそのパーツのつくり替え（リモデリング＝新陳代謝）のことで、これによって老化を克服しているのです。われわれ高等な脊椎動物は、エネルギー代謝のほぼ九〇％を呼吸でまかっています。ですから、生命を支えるエネルギーの渦を回す呼吸がだめになれば、健康がそこなわれるということになるわけです。

② エネルギーの渦の回転と免疫力

いわゆる免疫力とは、細胞レベルの消化力と細胞の生命力のことで、腸管から吸収された細菌やウイルスや不良栄養から優良栄養までを、血液内で細胞レベルの再消化をして、リモデリングする力、つまり新陳代謝力のことです。したがって、いま流行りの「自己・非自己」を見分ける力のことではありません。そしてこの働きには、エネルギー代謝、つまり呼吸と解糖の円滑な回転が必須なのです。骨のアパタイトのピロリン酸エステル（高エネルギーの燐酸化化合物で呼吸と核酸の代謝に必要なもの）が呼吸を、軟骨のチオールエステル（嫌氣的解糖に必須の高エネルギーの硫黄化合物）が解糖を担当します。それで睡眠、つまり骨休めを怠るとエネルギー代謝が阻害されるのです。

腸を冷やせば腸管造血系がダメージを受けて、潰瘍

れを当てはめたところに現代の免疫学の悲劇があります。それで免疫病がいまの医学で治せなくなってしまうのです。

日本を代表する免疫学者が、「免疫の意味論」といった、アンチ・クリストの文学論をかかげて、「免疫病とはサタンがキリストに化けて操っているようなもので、訳の分からないものだから病気になるってしまつた人はあきらめてください」と解説したものですから免疫病が氾濫してしまいました。こんな無責任な医学者らしからぬ免疫学者の見解に基づいて、わが国の医者は免疫病は治さなくても当然ということになってしまいました。それで免疫病で苦しんでいる人は現代医学から見離されてしまったのです。キリスト教文明を持ち出しさえすれば、すべてフリーパスになるのは文学であって、科学の世界ではありません。免疫病はエネルギー保存の法則をど忘れした結果、エネルギーの不適切な摂取とエネルギー代謝の呼吸の失敗によって起こっているのです。

二〇世紀最大のサイエンスの成果は、一九世紀の「質量保存の法則」がエネルギー保存の法則に書き改められたことです。しかし、実生活では、二一世紀の今日においてすら、とくに医学やライフサイエンスでは、完全に一九世紀の宇宙理解のもとに学問が成立し

性大腸炎やクロン病や眠なし病、喘息やリウマチといった難病になります。いわゆる自己免疫疾患とは、腸の使い方の誤りで起こる細菌やウイルスの感染で発症する新陳代謝の障害です。過労も同様で、すべてはその基礎に呼吸と解糖のエネルギー代謝の失敗があります。

質量のある物質である栄養や酸素、ミネラル等だけで健康を考える時代は終わったのです。質量のない重力や光線エネルギー、寒冷刺激、温熱刺激等のエネルギーの個体外からの作用も呼吸に影響することを忘れてはいけません。

今日、免疫病が「自己・非自己」の免疫学によって治せなくなってしまったのは、ル・ドランというフランスの女流学者によって行われたキメラの実験が原因のひとつといえます。彼女は実験で、胎生期（卵の発生過程）のウズラの脳や神経堤の一部を胎生期のヒヨコに移植してキメラをつくりました。ヒヨコが育つてくると、ウズラの羽がヒヨコの白血球によって消化されて脱落して、結局ヒヨコは死んでしまいます。これこそ自己・非自己を見分けるものだといって大騒ぎをしたわけです。このような状況は自然界では絶対に起こりません。動物実験のみで起きる現象を、自然界で発生する事象（病氣）に当てはめてはいけません。そ

ています。質量のある物質は、ある極限状態になると膨大なエネルギーに変換されます。これで原子力が人の手に入りました。つまり、エネルギーとは質量のない物質と等価ということなのです。いま、免疫病は質量のない物質エネルギーによって発生しているのです。エネルギー保存の法則は、一九世紀と二〇世紀の生命科学では、完全に無視されていたことになりました。

私は顔や背骨・骨髄のゆがみやつぶれの変形症も、形に現れにくい機能的な疾患である免疫病が形に現れた疾患であることを明らかにしました。そして免疫病と変形症が質量のある物質や栄養や酸素や炭酸ガスの過不足と寄生体の感染や有害物質によって生ずるのみならず、重力エネルギーによる骨格系のダメージと寒冷エネルギーによる腸のダメージおよび外呼吸の誤りによる内呼吸の障害、つまり個体外から作用する不適切なエネルギーの複合作用によって個体のエネルギー代謝が障害されることで発症することを、世界ではじめて解明しました。従来、質量のない物質エネルギーで病氣が発症するという概念が全く無かったのです。

③ 脊椎動物の上陸にともなう体の構造的変化

私は哺乳動物の筋肉内にヒドロキシアパタイト（アパタイト）とチタン電極を移植して、人工骨髄造血果

の誘導に成功しました。アパタイトによる造血組織は筋肉内への移植で簡単につくれますが、結合組織や皮下組織への移植ではまったくつくることができません。

血液や体液が行ったり来たりすると、流動電位が発生します。その電流によって遺伝子の引き金が引かれ、その結果、筋肉細胞から造血と造骨細胞ができるのです。

さらに私は、セメント質のできる哺乳動物の歯と同様の人工歯根を開発しました。この二つによって、脊椎動物の進化が重力を中心とした力学作用によって起こることを発見しました。

ところで、人体の構造欠陥には、口呼吸ともうひとつ、直立二足歩行があります。人類はこれによって、ゴリラやチンパンジーのようなナルック歩行(握った拳を支えにして歩く)から手が自由に使えるようになりました。しかし直立二足歩行は、四つ足と比べて重力作用がほぼ二倍、二Gを受ける勘定になります。たとえば、五キログラムもある頭を一五〇〜一八〇センチメートルの高さに保つには、相当な位置のエネルギーを要するわけです。このエネルギーはすべて、血圧に変換されます。

たとえば、原始脊椎動物のサメでは、浮力に相殺さ

は、水中では〇・七%だったのが、陸では二一%になりますから、三〇倍に増えることになりました。それとともに、生活媒体が水の一〇〇〇分の一の重さの空気に変わりますから、これに対応して身体は劇的に変化するのです。

さらに、水というのはこの世の中で保温性がいちばん高く、比熱が一です。陸に上がれば、比熱の非常に低い空気に変わりますので、温度刺激に対して身体が不安定な状態になるわけです。この時に、腸管にあった造血系が、軟骨から新たに発生した硬骨の髄空内に移ります。

ヒトの胎児は、羊水のなかに入っていると六分の一G、つまり無重力に近い状態にいることになりました。破水して生まれ落ちてはじめて、六倍の重力に晒される。その時が本当の上陸になるわけです。三〇〇〇日の胎児の世界は、ちょうどカンブリア紀以降の五億年の地球環境に匹敵します。

生命にとって最も重要な条件は水です。油の溶媒の生命はありません。溶媒は必ず水でなければなりません。なぜなら、すべての物質は電解質に解離しなければ、生命の渦、エネルギーの渦が回らないからです。生命体とは一〇〇%電気現象なのです。膜電位とよばれるものが、外胚葉と内胚葉から由来する神経系を制

れますから、見かけ上六分の一Gの水のなかでは、水銀柱で一五ミリ(Hg)です。イヌやネコなどの哺乳動物一般は九〇ミリHgです。人類も基本的には九〇ミリHgですが、常にこの数値を保つところが脳ですから、人間が直立している時は、心臓部位は一三〇ミリHgなければいけません。座っている時でも一〇〇ミリHgないといけない。眠っている時だけ、頭も体も九〇ミリHgになります。これが重力作用です。人間はこの重力作用に対抗して生きています。サメを陸に上げますと、苦し紛れに水を求めてのたうち回ります。そうすると血圧が上がります、循環が確保されて生き延びるのです。じつとしてみると重力の作用で血液が巡らずにサメは死んでしまいます。

つまり、脊椎動物の進化の第二革命といわれる上陸にともない、のたうち回ることでたまたま六倍の重力作用に対応できて血圧の上昇が起こります。脊椎動物三つの謎のひとつである骨髄造血発生の原因因子は、この血流の速まりというエネルギーの作用にあったのです。

また、脊椎動物が陸に上がることによって、身体は劇的に変化します。陸に上がる時の、いわゆる環境因子といわれていた生体力学的な変化の因子は、見かけ上の重力が六分の一Gから一Gになり、さらに酸素

御し、流動電位が中胚葉系の骨格と心臓脈管系を制御します。この二つの電位系統によって、同じ遺伝形質を持つ六〇兆の細胞から、部位によって形が違う器官ができあがっているのがわれわれの体です。

固体でも液体でも、水が動く膨大な電位が生じます。とくに海の水は塩類を含んでいますので、膨大な電氣的エネルギーが発生します。好気性の高等な生命体は、電氣的エネルギーの渦の回転を酸素を使って行います。これが呼吸です。呼吸には水と太陽エネルギーが不可欠です。

二〇世紀の科学は、エネルギーを病気の原因として考えることをせずに、葉等質量のある物質で治そうとしていました。腸を冷やしたまま、造血系を働かせ、あるいは、骨休めをしないで立つて働きながら、血液の病気を治しましょうというのがステロイド療法です。ステロイドホルモンというのは、われわれの体内に三〇種類ぐらい存在します。このうちの一種類だけを大量に体内に入れると、三〇種類のバランスが狂って、ある場合は、ステロイドが効いて造血系が作動して血液の病気が治ることもあれば、逆に治らないこともある。これらはすべて、当てるも八卦、当たらないも八卦なのです。そのようなことをせずに、副腎を温めて、自前のステロイドホルモンを刺激すればいいの

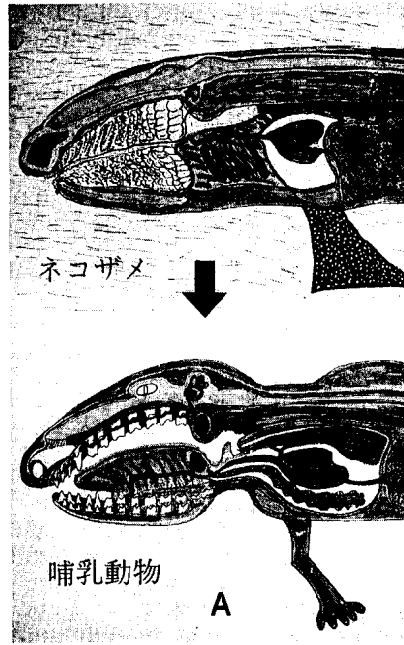
です。それにはまず、「骨体め」と「呼吸」を正すことが必須です。

④呼吸器の構造と役割

原始脊椎動物のナメクジウオは、一つのエラに一つの心臓があります。つまり心臓というのはエラのシステム(鰓腕)なのです。進化の次のステージの円口類は、左右に七対のエラがあつて、この二つが集まって一つの心臓になっています。円口類のエラはまるで心臓のごとく、ぐにやぐにやと動きます。

原始哺乳動物のネコザメは学名をヘテロドンタスといひます。このサメの鼻は、すでに哺乳動物の形になっています。哺乳動物の最大の特徴はヘテロドンタイプ、三種類の歯を持つことです。ネコザメの学名は哺乳動物の歯を持つサメということになります。ネコザメを一日一時間、陸に上げると、肺になる部分の含気囊が困心腔にできてきます。同様に、ドチザメを陸に上げると、爬虫類や鳥類と同じように、含気囊が骨盤域までできてきます。この含気囊が第六鰓腺部(エラの腺)に破れると肺になるのです。

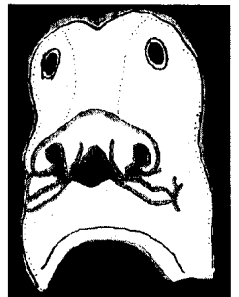
ヒトの胎児の三二日目とネコザメとを顔の外鼻と口腔のつくりで比較すると、それらのパーツが完璧に対応します。ですから、ネコザメは間違いなく哺乳動物



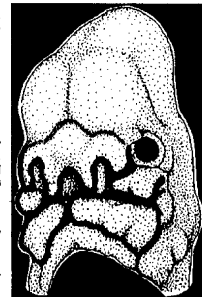
人間の呼吸内臓筋は、サメと比較すると、咀嚼筋、表情筋、嚥下筋、発声筋、舌筋と食道部分までがサメの呼吸鰓腸筋にあたります。つまり、本来の呼吸用の筋肉で咀嚼や発声をするということです。

実は、呼吸のシステムは原始形では、腎臓、泌尿器、生殖器もエラにありましたから、人間のエラのシステム、つまり呼吸器は骨盤域まで伸びていることになりす。

脊椎動物とは、骨化の程度は異なりますが、骨性の脊柱を持つ脊索動物のことで、骨が定義物質です。そ



ネコザメの成体

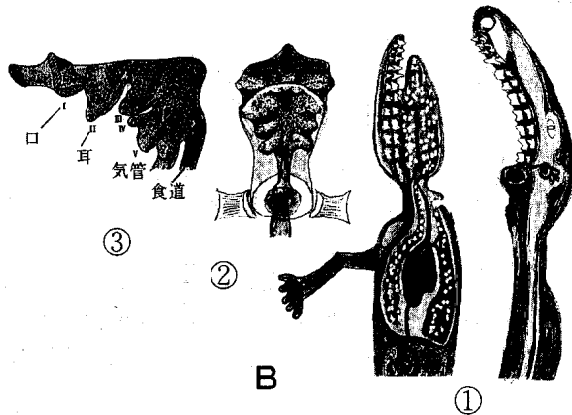


ヒトの胎児の32日目

図1

経によつて支配されますので、これもまたぴつたりと一致します。人間の舌は完全に心臓の筋肉と同じで、舌の筋肉を組織培養すると、心臓の筋肉とまったく同じように、最初はチツチツと動きます。

これはサメ(原始型)から哺乳動物が発生する過程のエラの変化を示しています(図2A・B)。いちばん最初のエラが内耳になります。耳は呼吸孔という窓を持った腸管(鰓腸)のエラの機能がいまも残っていて外とながっている唯一のシステムです。そして舌もエラの筋肉部分でできています。



- ①は哺乳動物の肺の発生図
- ②はヒト胎児のエラ・肺の個体発生図に
困心腔とヒレを加えた図
- ③は②を横から見たもの

図2 サメ(原始型)から哺乳動物への系統発生の過程におけるエラの変化

して、他の動物のほとんどが皮膚呼吸なのに対して、脊椎動物は腸管呼吸を行います。腸管呼吸というのはエラと肺のことで、われわれ哺乳動物だけが、心臓の周りにある困心腔に肺が発生します。あとの動物一般は困心腔をそのままにして、肺が骨盤域の腸にまで伸びていますから、腸の酸素不足が起きにくいのです。

ところが、人類は肺が囲心腔にとし込められたうえに直立歩行になってしまったために、重力作用によって腸の酸素不足を起しやすく、その結果、骨休め不足でまず偏頭痛や頭痛が起り、それを過ぎると鬱病になるわけです。

呼吸の誤り

ところで、呼吸には肺までの外呼吸と、細胞レベルの内呼吸があり、この両者は密接不可分の関係にあります。

日本人に多い外呼吸の誤りは二つあります。一つが、口で息をすることです。二つめが胸式呼吸の浅い呼吸です。腹式呼吸といった横隔膜で呼吸をすることが大事です。

日本人の多くは常時、口と肛門が開きっぱなしなので姿勢が悪いのです。これでは健康は保てません。まず口をしっかり閉めて、歯と歯の間を一ミリ開ける。そして尿道と肛門を閉じて、横隔膜を上に向かつてつり挙げて呼吸すると、吸う時に丹田がへこみます。常時、こうした姿勢で歩いたり、座ったりすることを心がけると、腸の酸素不足が解消し健康になります。

睡眠中は必ず上を向いて寝ないといけません。横向きやうつ伏せでは下側の鼻が詰まってしまつて、口呼

吸になつてしまいます。寝る時は、唇を閉ざして、鼻孔をノーズリフト(鼻腔をひろげる装置)で十分に拡大しておいて、ふわふわとした柔らかい枕で真上を向いてお休みになることです。

睡眠中に口呼吸をすると、風邪症状になります。これは無害なバクテリアが扁桃腺のM細胞からとめどなく体内に入ってきて免疫病となるからです。M細胞では体内にバクテリアを取り込んで、インムノグロブリンAを生成し、それが涙や唾液に出できます。腸のなかでは、腸の分泌液に出できます。口で息をすると、唾液や涙が枯れ、その結果、分泌されないインムノグロブリンAは血液中を巡ります。そして、腎臓の糸球体という濾過システムへいき、この蛋白質が糸球体を詰まらせます。これが日本人に多い透析の必要なインムノグロブリンA腎症(IGA腎症)です。

さて、内呼吸についてですが、今日の医学では、エネルギー代謝や免疫力の面からはあまり考えられていません。呼吸の本質はエネルギーの渦を回すことで、その主要な働きをする細胞小器官はミトコンドリアです。

ミトコンドリアでは糖を分解して酸化的リン酸化を行い、TCAサイクルを回して高エネルギー物質のATPをつくり出します。この時にカルシウムとリン酸とチ腸炎やクローン病やリウマチといった難病になります。

呼吸の実質的な働きをするのは血液で、これを送るのがポンプ作用の心臓ですから、そういう意味で、呼吸にとつて血液の作用と心臓は必須といえます。呼吸とは酸素を使って栄養物を燃焼することですが、この材料となるのが食べ物です。

我が国で、とくに今日問題になるのは、乳児に冷たいミルクを与えることです。冷たいミルクで育つた子供は冷たいもの中毒になります。これは非常に危険なこと、腸を冷やすと冷血動物のようになって、その結果、問題の「キレる一七歳」のような事件が起こります。腸を冷やすと、腸がしもやけ状になり、さきほど述べました腸扁桃(盲腸など)からとめどなく腸内細菌が体内に入ってきて、さまざまな免疫病を発症します。いま日本中が冷たいもの中毒に陥っており、その結果として、多彩な免疫病が起こつてきています。

① 冷たいもの中毒

一つめが、いま日本人のほとんどが「冷たいもの中毒」に罹っているということです。腸を冷やすと、昔はおなかをこわすとして冷たいものを飲んだり食べたりしないようにしていました。四度Cのミルクやビールを飲めば腸管造血系がダメージを受けて、潰瘍性大

② 「骨休め」不足

二つめの誤りは骨休め(睡眠)不足です。横臥して重力エネルギー(位置のエネルギー)を解除する睡眠が不足すると、造血系が障害され、結果として細胞呼吸と解糖系が阻害されます。大人で最低八時間、子供で一

○時間の睡眠が必要です。

骨と軟骨とコラーゲンは脊椎動物にしか存在しない物質です。そして、これらはすべてエネルギー物質で成り立っています。とくに、骨はピロリン酸エステルといつて、高エネルギー物質の核酸のATP、GTPを生成する供給源です。軟骨はチオールエステルといつて、嫌氣的解糖、酸素のない状態で代謝するエネルギーの要の物質です。ですから、人間が立っているだけで、エネルギー代謝の要である造血つまり血液のリモデリングがストップすることになります。血液の病気になる人は、決まって冷たいもの中毒で骨休め不足なのです。

睡眠とは骨休めのことですから、座って眠っても効果はなく、重力解除が必要です。そういう意味では、温泉療法は非常に有効な重力解除になります。温泉に入つて十分に骨を休めて、温泉から出ると重力が六分の一Gから一Gの世界に戻りますので、横になって休む。せつかく温泉に入つて重力解除しても、すぐに立ち上がって活動すれば、二Gの重力を受けますから、またくたびれてしまうことになります。

③腸管内臓系の使い方の誤り

三つめが、腸管内臓系の使い方の誤りです。口呼吸妊娠中にアイスクリームをたびたび食べますと、生まれた子は母乳でもアトピー性皮膚炎がしばしば発症します。腸を冷やしてアトピーになるのは、腸でM細胞がとどめなく腸の常在菌を吸収し白血球が皮下組織まで運び、そこで消化してその産物を皮膚組織に捨てるからです。じんま疹は悪いものを食べると、五分で皮膚に現れます。原始脊椎動物のサメの時代から、皮膚は白血球がバイ菌やアミンを消化して排出する場なのです。アトピーの乳児には離乳食を止め、乳児用のミルクに戻し、澱粉や純白米の重湯状のものをほんの少々に換えただけでも一週間で玉の肌になります(写真1)。お母さんも冷たいもの中毒で手が荒れていました。冷たいものを止めたなら一週間で肌がきれいになりました。

一歳未満の子には蛋白質はポイズン(毒)だというアメリカ医学では常識のことも、残念ながらスポック博士の誤った育児法をかたくなに守っている日本の小児科医には、全く知られていないのです。赤ちゃんによつては、一歳半でも蛋白質を与えると食品アトピーになります。二歳半までは母乳中心でいいのです。猿人から原人になって、それが人類に進化してきているのですから、人間の乳児も母乳だけで二歳半まで育たないはずがありません。人の浅知恵で、とんでもない

と暴飲暴食の嚙まない食べ方は腸管を酒や食物でいためつけます。それに乱れた生殖行為です。口も鼻も生殖器も肺も、すべて腸管に由来します。腸管内臓系の使い方の過ちで、常在菌や病原性の弱い細菌が腸扁桃のM細胞から、とどめなく体中に入ってきて免疫病となるのです。女性の場合はとくに、生殖系からの不顕性(はつきりしない)の感染が多いのです。

生殖に関しては、脊椎動物一般が嗅覚を生殖の引き金としていますが、霊長類になるとこれが視覚に移ります。イスラムの世界では生殖年齢に達した女性だけが顔を隠す風習がありますが、これも生殖の効果器官が嗅覚の鼻から視覚の顔へ移ったためです。ヒトでは顔が生命を代表する器官であり、顔が生殖行動の引き金となる視覚刺激となっているのです。

④筋肉の使い方の誤り

四つめが筋肉の使い方の誤りです。交感神経性のスポーツは体に悪いのです。副交感神経で眠るように筋肉運動をすると、細胞呼吸が活性化してまいります。

機能性疾患の症例と治療例

それでは、私の扱った治療例をスライドで見たいと思います。

子育ての誤りを犯しているのがいまの我が国なので

写真2の患者さんは小学六年生ですが、生後七カ月からずっとアトピーに罹っていました。顔が黒ずみ、体も同年代の子供に比べてすごく小さい。これは睡眠時間が足りないからです。六年生という年齢で睡眠を七時間しかとっていないのです。顔が真っ黒なのは腸を冷やして皮膚が酸素不足となっているためです。腸を冷やして、睡眠時間が短いと、背が伸びません。そこで冬休みを挟んで、睡眠時間一三時間を二週間続けましたところ、背も六センチ伸びて大人っぽくなりました。五カ月後には顔の色も真っ白になりました。

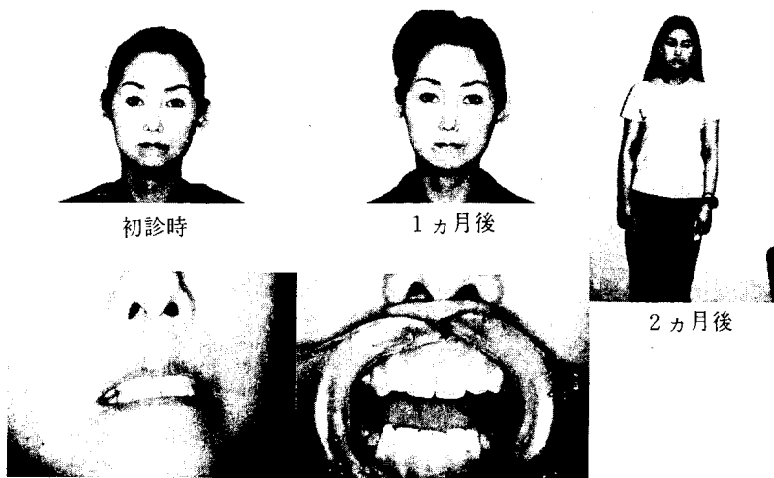
写真3の幼児は、乳児の時に横向きで寝かされていたために、頭の格好が分厚い辞書のようになっていました。そして完璧な口呼吸で酸素不足の顔をしていました。口は鼻よりも広いから、さぞかしたくさん呼吸ができるだろうと思うのは大間違いです。鼻は呼吸粘膜でできていますから、酸素が吸収され空気も浄化され加湿されます。一方、口呼吸では扁桃組織のM細胞からバクテリアが体内に入ってきます。口をおしゃぶりで塞いで一カ月もすると、顔つきまで変わってきました。口呼吸で酸素不足の時は髪の毛がぼやぼやと立っていました。鼻呼吸に矯正して僅か一カ



初診時

1ヵ月後

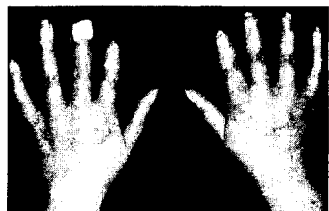
写真3 乳児の時、横向きで寝かせていたため頭部の形が分厚い辞書のようになっている



初診時

1ヵ月後

2ヵ月後



- ▲口呼吸で歯に筋がついている
- ◀爪の感染で指が短くなっている

写真4 脈なし病と強皮症で来診



初診時

1週間後

写真1 離乳食アレルギーの治療例



左：初診時

右：5ヵ月後

初診時

1ヵ月後

写真2 アトピー性皮膚炎の治療例

月で、髪の毛が真っ黒になつて来てきました。このくらいに鼻呼吸は重要なのです。

写真4の患者さんは、脈なし病と強皮症といった難病に指定されている二四歳の方です。口呼吸が原因で体内に入つた雑菌が、動脈に巣くつているのが脈なし病です。

いまの日本の医療は、難病に指定されると、公費負担医療制度が適用されます。この制度は弱者救済のように見えますが、共産主義医療と同じで、弱者が犠牲になる制度なのです。つまり、難病に指定されれば治さなくていいわけです。脈なし病に罹ると血の巡りが悪くなつて爪が感染します。このような方が病院に行くとき、すぐに指をちよん切られちゃいます。

膠原病に苦しむ患者さんは、ひどい口呼吸でした。背も小さくて、皮膚がペラペラで張りが無くカサカサでした。小さい時から冷たい水がないと食事ができないといひます。膠原病はコラーゲン繊維ができない病気です。コラーゲンというのは脊椎動物特有の硬蛋白質で、人体には三五%ありますが、腸を冷やすと、消化吸収ができないので、栄養障害になります。そこで一カ月間、体を温め、鼻呼吸に改めたら、皮膚がうるおいを取り戻し姿勢が良くなり、体ががっしりとしてきました。

原因不明で失明して一三年、大病院の眼科に通っている方が私のところに来ました。症状は悪化する一方でしたが、拙著『健康は呼吸で決まる』を音声に変換して聴かれて訪ねてきました。問診してすぐに原因が解りました。顔にアトピーがあり、タラコ状の唇でひどい口呼吸でした。無理に口を閉ざすと、顔に梅干し状の皺が寄ります。「若い頃、アトピーにもかかわらず、口呼吸で激しいスポーツをしたでしょう」と質問したところ、案の定、「学生時代にアメリカカンフットボールとラグビーをやつて、社会人三年目に、車を運転していたところ、突然、信号が無くなつて失明したことに気づきました」という答えがかえつてきました。さきほどの例と同様に、目、鼻、耳、神経、脳、髪の毛、皮膚のすべてが外胚葉から発生し由来が同じです。網膜にもアトピーが起きていただけなのです。スポーツをすれば、冷たい水を飲んで、口で息をします。アトピーはとろけんばかりになります。それが網膜に起これば、目が見えなくなるわけです。アトピーを治して、体を温め、九時間の睡眠を摂り、鼻呼吸に直して、喉をきれいにしました。それを二、三ヵ月続けましたところ、うつすらと光が見えてきて、いまでは色もほんの少しですが解るようになりました。ただし、失明して一三年もたつていますか

この患者さんは、バスを待つていたら突然、体中にじんま疹が現れ、気絶してしまいました。最初の頃は、こういった症状が一年に一度のペースで現れていたのが、半年に一度になり、ついに一週間に一度ぐらいで出るようになりました。この方の居住区の高齢者センターで、たまたま私が「口呼吸は万病のもと」という講演をした時に聴講され、倒れる原因は口呼吸に違いないと確信して、鼻呼吸に直したところ、じんま疹と気絶が起こらなくなったそうです。そして、私のところに来診されたのです。鼻呼吸にしただけでは、かなり腑抜けの顔をしていましたので、キシリトールガムを噛んでもらい片噛みの癖を直して、睡眠姿勢を正しましたら、一週間で見違えるようになりました。なぜ気絶するかといひますと、皮膚、目、毛髪、神経、脳などはすべて外胚葉に由来します。由来が同じ組織には病変が共通して発症するためです。ですから、ひどいじんま疹では、脳の間葉グリアにもたれた炎症が起こっているわけです。それで気絶してしまうのです。

個体発生や系統発生・進化といったことをよく熟知していれば、奇病といわれるものも原因が容易にわかるはずですが。こういうトラブルのある患者さんは、決まって喉が荒れ、頸部リンパ節も腫れています。

ら、完璧に戻るのには難しいかもしれません。

喘息の発作は風邪症状の時に起こります。そして、いくら痰を飲んで、狭いところに空気を通すと、空気が刺激でまた鼻汁が出て、口で息をせざるを得なくなります。それでとどめなく咳が出ます。鼻汁をきれいに取り除いたあと、ノーズリフトやブリーズライトといった鼻腔をひろげる装置を使って、鼻の容積を七〇%ほど拡大するだけで、まったく鼻汁が出なくなり、喘息の発作もなくなります。さらに医療用テープなどで唇を完全に塞げば咳はしなくなります。

潰瘍性大腸炎も口呼吸と冷たいもの中毒と骨休め不足が原因です。口から肛門まで、鼻も生殖器も全部、腸管の一部です。肺も腸に由来しています。口呼吸で扁桃リンパ組織が感染し、喉から白血球によって運ばれて、皮膚や血管や肺にバイ菌が散る人や大腸にバイ菌が感染する人のすべては血行性の感染です。感染場所によつて病状が違いますが、病気のものは同じです。ですから、治療法はまったく同じなのです。エネルギーに目覚めれば、これからは潰瘍性大腸炎やクローン病や膠原病や喘息といった難病は治療がもっとも易しい病気になるでしょう。

しかし簡単に治ると安心して、もう一度「冷たいもの中毒」にもどつて、冷えたビールを飲んで

と、もう二度と回復しません。それが免疫病の怖いところですよ。

いま、リウマチには制ガン剤を使います。制ガン剤は骨髄系を抑制しますから、まずこれを少しづつ止めて、同時に鼻呼吸、体を温めるとよく治ります。

それから、歯の治療に使用するアマルガムや重金属は沈着するとウイルスや細菌の感染が起きても、抗生剤等が無効となる複合汚染を生じますから、これに対する有効な手段をとれば、リウマチも本当によく根治します。また、マグロにはかなりの量の水銀が入っていますから、マグロばかりを食べていた人は、水銀を排除しないとよくなりません。早期なら完璧に治りますが、免疫病はあるレベルを過ぎると手遅れになることがあります。

子育ての誤り

日本人に寝相、片噛み、口呼吸の三つの癖をもっている人が多いのは、子育てに誤りがあるからです。いまの日本の子育ては、いまままで述べてきた脊椎動物のうち哺乳類としての人類のあるべき育児法からはずれているためです。

昭和四一年に『スポック博士の育児書』が日本で翻訳され、一斉に医者とインテリ層の子供がこの育児書

で育てられました。その人達がいま三十歳台の中頃の年齢になっています。昭和五年に厚生省は『スポック博士の育児書』を一〇〇%、母子健康手帳に導入しました。その二年後から急激にアトピーと難病が増えています。そして、その二年後の昭和五七年生まれの人達が、いまから二年前に問題になった「キレる一七歳」にあたります。彼らのほとんどが口呼吸と冷たいもの中毒と骨休め(でたため睡眠)といっても過言ではありません。

昭和五年というのは、ちょうどアメリカで乳児ポツリヌス症が起こつて、スポック博士はアメリカの医師から完璧に否定され、追放された時です。赤ちゃんの腸は大人の腸とまったく違って、蛋白質を消化しないですべて吸収してしまうことが解りました。そして抗体をつくるために、アトピー性皮膚炎を皮切りとしてアレルギーマーチといった、アレルギー疾患が次々と押し寄せることが、乳児ポツリヌス症事件を契機としてアメリカで明らかになったのです。アレルギーマーチの源になるのが離乳食の蛋白質だということが解りました。それ以降、アメリカの良識ある医師は離乳食はポイズン(毒)であるとして、一歳未満の乳幼児には絶対与えないようにしています。この良識が日本には二〇年間入ってきていないのです。

日本の小児科医は、この二〇年間、小児の便を一度も検査したことがありません。五、六ヵ月から離乳食をすれば、完璧に緑便になり、やがてアレルギーになります。しかも、口呼吸で喘息に罹る。こうして育つ子供が大人になると、間質性肺炎や気管支炎、潰瘍性大腸炎からクローン病、さらにはリウマチになるわけです。早急に子育ての誤りを正さないと、日本は滅んでしまいます。そして子育ての誤りは、結局は成人の「呼吸」と「食事」と「睡眠」の誤りに帰するわけです。エネルギーが質量のない物質で、これによって病気が起きることに早く目覚めれば、三〇兆円の医療費は五兆円ぐらいいで済むのです。

人類が言葉話すようになると、それにともなつて鼻腔と気管が離れることは冒頭で述べました。ちよう

どこの時期に、おしゃぶりを取り上げると、子供は一〇〇%口呼吸になります。欧米では四、五歳までおしゃぶりを使わせています。ところが日本では、そういうことはお構いなしに、一歳で取り上げてしまします。口呼吸になると、寝相が悪くなって、頭の重さで歯形が潰れて歯並びが悪くなります。そうなる何百万円もかかる歯列矯正が必要となります。口呼吸と寝相を直すだけで歯列は矯正されるのです。

この他にも、俯せ寝・横向き寝をさせる、舌でなめて認識するのを汚いといつて止めさせる、乳母車を早く止める等の子育ての誤りがあります。

最近の子供の顔は非常に側面が細くなつてきています。まるで分厚い辞書のような頭の格好をした子供がたくさんいます。横向き・俯せ寝は自重で顔と

背骨を潰します。そういう子供は口呼吸になりますので、必ずといっていいほどアトピーと喘息が起ります。上を向いて寝かせるだけで円い顔になり、健康になりません。

質量のない物質エネルギーを見直す

明治時代には、質量のある物質、つまり栄養障害で免疫病が起きました。もともと有名なのは脚気です。この病気はビタミンB1の不足が原因です。心臓の呼吸が障害される重症例ではすぐに死んでしまいます。日露戦役では脚気で二万人の軍人が死んでしまいました。頑迷に脚気伝染病説を唱えた森林太郎(鷗外)が、わざわざ純白米食にしたためです。明治天皇ご自身が脚気を患ったために、超法規ですでに陸軍と海軍で純白米食と麦飯・洋式食の実験が大々的に行われ、後者において脚気が完璧に克服されていたにもかかわらず、強引に純白米食を供給したのが陸軍軍医総監の森林太郎(鷗外)だったのです。これが栄養障害によって起こる細胞呼吸障害の免疫病です。ビタミンCの欠乏でも、死に至らないものの、細胞呼吸が障害されて壊血病(血管のコラーゲンができそこないになる病気)に罹ります。

いまは質量のある物質では排気ガスや毒物以外には

て、もはや時代遅れとなったわけです。

病気の治療は、現代医学で進んだように見えますが、これらはすべて器質性の疾患です。機能性の疾患は体の使い方の誤りによって起こる病気です。免疫病も詳しく見ると、ただの常在菌や雑菌やウイルス感染といった、はつきりしない感染が、エネルギーの使い方や摂取の仕方の誤りで、体がくたびれているために発症する病気であることがほとんどです。

科学とは「錯綜する現象の背後に潜む法則性を解明すること」です。医学には、法則性をもって疾患の原因を明らかにし、法則性をもって治すことが求められます。機能性の疾患は明らかにエネルギーの摂取の誤りと呼吸法の誤りで起こる雑菌等の感染によるということが明らかになったのです。

病気は起こりません。それほど栄養がよくありません。目を転じて、質量のない物質エネルギーに注目すれば、病気は容易に予防できます。この概念が世界中に無いのです。とくに、キリスト教の世界では、エネルギーは霊的現象として蒸発してしまいます。これが問題なのです。キリスト教の世界から脱却しない限り、免疫学を書き改めることはできません。

いま、分子生物学が花盛りですが、もはやこの時代は完璧に去ってしまつたといつていいでしょう。なぜなら、原生動物や細菌・ウイルスといった、あまりにも微小な世界を扱っているからです。哺乳動物の一粒の培養細胞といえども、ブラウン運動、水の分子運動で動きます。レイノルズ数が一以下の微小な物体にはニュートン力学は一切作用しませんから、重力の圏外の物語なのです。脊椎動物のような重力作用をまともに受ける動物の健康と病気の科学には、もはや分子生物学的研究は無意味ということになります。分子生物学の世界は、一万Gから一〇万Gでも生きています。この分野はテクニシャンに任せておけばいい時代になつてしまいました。多細胞生物は、重力作用が血圧に変換され、それが流動電流によって制御されているというところまで解っているのですから、重力作用の及ばない細かい基本的な分子生物学研究はし尽くされ

キリスト教の世界では、いまや処女懐胎は誰一人として信じておりません。ポロニーヤにあるジョットの絵に、凧揚げのようなキリストの昇天を描いているものがありますが、人が飛ぶようなことを信じたふりをして、今日でもエネルギーを全部無視して、重力を無視して、科学を玩んでいるのが西洋医学です。

余談ですが、イエス・キリストが梅毒にかかった状態の頭蓋の解剖模型がフイレンツェ大学の動物学教室のラスペコーラ博物館に所蔵されています。当時の西洋人のなかにも醒めた人がいたのです。キリストの時代には梅毒はなかつたので、この蠟の模型はメデイチ家の当主が梅毒に罹って、悔し紛れにズンポという破戒僧につくらせたものです。この蠟人形の解剖模型が大学の博物館にあるというところに意味があります。

人工太陽光治療法

いま、健康のために気功をする方がふえました。私が「健康は呼吸で決まる」といった講演をすると、まず患者さんが来ます。その次に気功で腕自慢の人が患者さんを紹介してくださいます。この人が「気」を投入するところを写真に撮ると、確かに光が写ります。「気」という電磁波で、脂肪腫が縮小し、やがて無くなります。どうやら病気が治るようです。写真に渦巻きのような光が出るのですが、これが生命エネルギーです。気は体温と同じ生命エネルギーで、たぶん電磁波（生物電気）と思われれます。この光の写真は最先端医学の統合医学会総会の特別講演で発表した写真です。

いまから約百年前の一九〇三年にアーク燈で行う人工太陽光線治療法が、デンマークのニールス・フィンゼンという医師によって開発されました。当時まったく治せなかつた皮膚結核を治して、彼はノーベル賞を受賞しています。ニールス・ポアアがこの光線治療について研究しましたが、彼は医者でもなかつたし、生物学者でもなかつたので、確たる成果が得られないままに、やがてこの治療法は民間療法になってしまいました。太陽光を当てるとヘモグロビンが励起して、酸

素を抱える量が飛躍的にふえます。足の裏に三十分間当てるだけで、ドロドロとした紫色の生理の血液が鮮紅色になって元気になります。高齢出産の方にこれを使いますと、安産で生まれてきます。悪阻も一切ありません。お金のかからない治療法です。光線で血液の消化力を強化して自前の副腎皮質ホルモンを活性化して、白血球にバイ菌や腫瘍を食わせればいいわけです。生命エネルギーというのは体温と同じ電磁波です。生命エネルギーの「気」で治療するよりは人工太陽光の治療の方がはるかに有効で確実です。このような有効な治療法が百年間も埋もれていました。これは二一世紀のエネルギーによる治療法となるでしょう。キリスト教文明を中心とする西洋文化が導入された文明開化からすでに百三十九年が経ちました。二千年紀は基督教に代わる新しい生命哲学が必要となる時代です。

日本の二千年の英知を復活させて、そろそろ日本独自の生命哲学に根ざした医学を復活させなければいけない時期にさしかかっているものと思われれます。

ご清聴ありがとうございました。

（西原研究所（健康と美容の医学）所長・日本免疫病治療研究会
長・東大・医博・昭45）

（本稿は平成13年10月10日夕食会における講演の要旨であります）